

カウンセリング技法習得における モデリングの言語化の効果

臨床心理学専修 P07605 河越 隼人

(指導教員 玉瀬耕治教授・大久保純一郎教授)

問 題

マイクロカウンセリングは、カウンセラーの技法獲得の訓練を行うためのプログラムとして開発された。訓練は解説 → モデリング → 練習 → フィードバックの流れで進められる。訓練手順に含まれるモデリングが効率的に達成されれば、技法獲得が促進されと考え、本研究ではその点に注目する。モデリングとは、他者の行動を観察することで行動パターンを習得するものであり、注意・保持・運動再生・動機づけという4つの下位過程に分けられる。モデリングにおける学習は、保持過程における言語表象の働きが大きい。言語表象を実験的に操作する場合、言語化という手続きが用いられてきた (Bandura, *et al.*, 1966; 坂野, 1986)。これらの研究では、モデルの行動内容を言語化した観察者は、言語化しなかった観察者よりも遂行が優れていた。

記憶研究から見ると、言語化とは精緻化であると考えられる。精緻化とは対象となる情報に対して何らかの情報をつけ加え、認知機能を促進するということである。豊田 (1998) は、実験参加者に自ら情報を生成させる方が、実験者によって付加する情報を提供されるよりも有効であることを指摘している。

本研究は、上記の考えを参考に、マイクロカウンセリングにおけるモデリングの言語化の効果を検討する。

方 法

実験参加者 大学生45名 (男性23名・女性22名)、平均年齢21.16歳。

実験条件 言語化条件として、観察者が言語化 (自己言語化群)、実験者が言語化 (実験者言語化群)、言語化なし (統制群) の3条件 (各15名)。テスト条件として、モデル観察前 (事前テスト)、モデル観察後 (事後テスト)、1週間後 (追跡テスト) の3条件。

課題 マイクロカウンセリングで扱われる技法の1つ、言い換え技法 (paraphrasing)。

材料 実験者が作成した「日常の出来事」の刺激文 (140字~160字)。

実験手続き

<事前テスト> 実験参加者に「日常の出来事」を聞かせ、それに対して言い換え技法を用いて応答してもらう。(2回)

<処遇段階> 「日常の出来事」と、それに対するモデルの応答を聞かせる。その後、自己言語化群の参加者には、モデルの行動内容がどのようなものであったかを質問。実

験者言語化群の参加者には、モデルの行動がどのようなものであったかを実験者が説明。統制群の参加者は、モデリングのみ。

<事後テスト>実験参加者に「日常の出来事」を聞かせ、それに対して言い換え技法を用いて応答してもらう。(2回)

<追跡テスト>1週間後、実験参加者に「日常の出来事」を聞かせ、それに対して言い換え技法を用いて応答してもらう。(2回)

結果と考察

各テストでの応答内容の得点化は、刺激文を5分割し、その部分を適切に言い換えたものが含まれていれば得点を与えるように評定を行った(言い換え得点:1応答につき最大

5点)。実験者と大学院生2名で評定を行い、評定者間の κ 係数は.71~.81であった。評定の異なった部分は3者で合議決定した(Table 1, Fig. 1)。3(言語化)×3(テスト)の分散分析を行った結果、言語化とテストの交互作用($F(4,84)=3.44, p<.05$)が有意であった。下位検定の結果、事前テストでは全ての群に差がなく、事後テストでは自己言語化群が他の2群より言い換え得点が高く、追跡テストでは自己言語化群の言い換え得点が高く、次いで実験者言語化群、そして統制群が最も低かった。自己言語化群と統制群は、事前テストの言い換え得点が最も低く、事後テストと追跡テストに差は見られなかった。実験者言語化群は、追跡テストの言い換え得点が最も高く、次いで事後テスト、そして事

Table 1 言い換え得点の平均値と標準偏差

群		事前テスト	事後テスト	追跡テスト
自己言語化	<i>M</i>	2.00	6.27	6.53
	<i>SD</i>	1.79	0.99	1.59
実験者言語化	<i>M</i>	1.93	4.00	5.20
	<i>SD</i>	2.02	1.27	1.93
統制	<i>M</i>	1.00	3.67	3.47
	<i>SD</i>	1.41	2.36	1.96

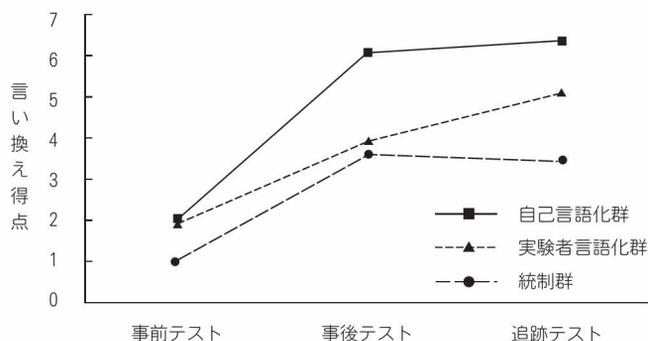


Fig. 1 言い換え得点の平均値グラフ

前テストが最も低かった。

3群ともに事前テストから事後テストにかけて得点の上昇がみられた。これはマイクロカウンセリングにおける技法の獲得にモデリングが有効であることを実証している。

事後テストにおいて自己言語化群の上昇が最も顕著であった。これは、モデルの行動内容を意図的に言語化することで保持過程における言語表象が促進されたためであると考えられる。実験者言語化群の得点は自己言語化群より低いという結果であったが、これは実験者によってモデルの行動内容が言語化された情報は実験参加者の知識構造に一致しにくかったため、モデリングの成立は促進されなかったと考えられる。事後テストから追跡テストにかけて実験者言語化群のみ得点の上昇がみられた。この結果を解釈する1つの可能性としてレミニッセンスが考えられるが、これらの解釈に対しての明確な裏づけ資料は、本研究では得られていない。

本研究で得られた結果から、次のことが示

唆される。マイクロカウンセリングにおける言い換え技法のモデリングでは、観察されたモデルの行動内容を言語化することで学習が促進される。そして、モデルの行動内容の言語化は、観察者自身が行うことが望ましい。しかし、他者による言語化も、時間が経過することで効果が顕在化する可能性を持つ。これらの知見は、マイクロカウンセリングの訓練法を発展させるであろう。

引用文献

- Bandura, A., Grusec, J. E., & Menlove, F. L. (1966) Observational learning as a function of symbolization and incentive set. *Child Development*, 37, 499~506.
- 坂野雄二 (1986) モデリングと言語 岩崎学術出版社
- 豊田弘司 (1998) 記憶に及ぼす自己生成精緻化の効果に関する研究の展望 心理学評論, 41, 257~274.